

春
夏
秋
冬

台湾徒然

柳本通彦



第五回 台湾最後の「流し」の死

昨年5月6日、台湾の主要紙がいずれも、社会面あるいは芸能面の1ページの大半を割いて、一人の男の死を報じた。

「金門王死す！」

金門島から来た王さんだから、金門王と呼ばれた一人の歌手が、ラジオ局の階段で心筋梗塞に襲われ、亡くなったのである。



淡水河口を背景に歌う金門王(左)と李炳輝(右)

彼は、盲目だった。そして、台湾最後の「流し」とも称されていた。

金門島は、中国福建省に属し、間近に大陸を望む、台湾の領土である。激しい戦火に見舞われたこともあり、今も昔も中台対決の最前線にある。金門王は、小学五年生の時に、「ごみ置き場で拾った不発弾で遊んでいるうちにそれが爆発し、両目と左手の先を失った。

まもなく台北に治療にやってきましたが手術に失敗し、以来彼は島には帰らず、自力で生きていく決意をする。新聞配達をしたり、簡単な作業の手伝いをしたりして、盲目の少年は必死で糊口をしのいだ。そして、二十数年前のある日、台湾西北部の町、淡水に流れしてきた。港町の人情や海峡の風土に漂浪する彼の心情が反応したのか、金門王はここに住みつき、近所の人の手を借りてギターの弾き語りを身につける。自由な右

手でコードを操り、左手首の先にチップをバンドで取り付けて、つまびいた。

以来、彼はをこの街で「流し」を稼業として生きてきた。茶室に終日たむろし、ホステスが呼びに来たら手を引かれて酒場へ出勤する。ときには、山をひこう越えた北投温泉へも出稼ぎにいった。日本人の買春観光団がどつと繰り出していった時代である。日本の歌謡曲を必死で覚えた。借りたLPレコードの回転を右手で押さえつつ、日本語の歌詞を聞き取り、旋律を手首に覚え込ませた。歌詞の意味はまったくわからないまま、500曲は暗唱したといふ。

金門王には、ともに淡水を流していた相棒があつた。李炳輝という。彼も幼少の頃に光を失い、アコーディオンを抱えて這つように生きてきた。盲目の流しの話を入づてに聞いて、台湾の著名ミュージシャン・陳明章が彼らのために歌を一曲つくつた。その歌は、「流浪到淡水」流れ流れて淡水へと名付けられ、彼らの初のアルバムとして市場に出ることになった。1997年ことである。

この1枚のCDが、二人に思つてもいない転機をもたらした。1年の間にCDの売上が実に50万枚、人口比でいくと日本では300万枚に匹敵する大ヒットであつた。金門王と李炳輝は、テレビイベントにひっぱり回され、台湾中知

らない人はない時の二人になつた。

アコーディオン抱えて

ギター片手に、二人のコンビ

稼業のために流れてきたのさ淡水まで

縁のある奴も、ない奴も

みんなやつておいで

さあ一杯やるか

飲み干せ、飲み干せ!

(作詞・陳明章)

この間幾度このメロディがテレビやラジオから流れたことであろうか。しかも、最後の「飲み干せ、飲み干せ」(福建語：ホッダラ、ホッダラ)の部分は、当地のキリンビールの「マーシャル」に使われたこともあつて、一大流行語となつた。

これで二人の人生は一変した。かのようになつたが、ヒット曲は結局それっきりで、再び淡水の茶室に入り浸る毎日が続くようになる。

たまに淡水に彼らを訪ねると、金門王が茶室の片隅で、ぼろりぼろりと古賀メロディを弾いていた。実にダンディな洪い男だった。目も手もないのに、憎いほど女たちが群がるのである。

二人のことが人びとの記憶から消えかけていた。今年5月5日、金門王は突然、この世を去つた。49歳、台湾海峡の申し子のような人生だった。最期は、宝くじ売りが主たる生業であつたといふ。